

「立てられた人たちⅡ」

エペソ人への手紙4：11

February.4.2024

エペソ人への手紙4：11（パウロ）

Preface

去年の11月第4週以来のエペソ書の御言葉となります。

これまでエペソ書を通して、主なる神様には、一度お造りになった天地万物の一切を作り変え、天にあるもの地にあるものすべてのものをご自分の名において一つとする、一つに集めなさるというご計画があることを確認して参りました。

そして、その神の造りなさる新しい世界に罪ゆえに入ることが出来なくなってしまった私たち人間罪人たちを、神の御子主イエス・キリストの十字架の贖いという恵みによって救い出し、その新しい世界神の国へ入れられるという福音を人々に宣べ伝えるためにお立てになった職分・役割を任せられた人たちが、使徒であり、預言者であり、伝道者であり、牧師また教師であるということを前回、11月の礼拝の中でお話し致しました。

特に今回は、「使徒」という職分について考えていきました。

前回の復習になりますが、「使徒」という職分は、恒久的持続的職分ではなく、一過性の限りある職分でした。

新約聖書の中に、使徒と称されるために必要不可欠な条件のようなものが記されていますが、一つ目は、使徒は自称でなれるものではなく、人から任命されるものでもない、2000年前に死より復活された主イエスから直接任命された者たちが使徒であるということです。

二つ目の条件は、一つ目の条件を満たす上で当然のように付随してくるものとなります。

つまり、死より復活なされた主イエス様に物理的に、視覚や聴覚や触覚や味覚などの五感を伴って出会っているということです。

実際、使徒となった弟子たちは、復活されたイエス様と、焼き魚やパンと一緒に食すという味覚まで伴った時間をイエス様と過ごしました。

（焼き魚にはご飯のような気がするのですが… まあそれはさておき…）

三つ目の条件は、神の御心を、神のご計画を、神の奥義を、神から直接超自然的な形で啓示を受けた者たちだったということです。

2000年前当時、今私たちが手にしている新約聖書は、当然ながらまだ存在していませんでした。

それゆえに使徒たちは、のちに新約聖書という聖典として承認されるだろう

神の御心の奥義を直接神さまから啓示を受け、それを神の命に従って書き残しました。

四つ目の条件は、その受けた啓示を正確に、神から与えられた権威をもってぶれることも、妥協することも、人に迎合し、人を安易に喜ばせるためではなく神に喜ばれるために、与えられた啓示を語ることの出来る力を頂いた者たちが使徒でした。

そして、最後に五つ目の条件として記されているのは、使徒たちはアッと驚くような奇跡を行うことの出来る者たちだったということです。

神さまは、彼らが語る神の奥義が真実であり真理であることを、人々が疑心なく信じる事が出来るようにと、不治の病にある人や悪霊に憑かれた人たちが癒されるような奇跡を行うことを伴わせて下さいました。

彼ら使徒たち自身が偉大であることを示すためではなく、あくまで、語る神の言葉の真実さを示すための奇跡でした。

これら五つの条件を満たした使徒たちこそ、イエス様の12弟子であり、使徒パウロでした。

彼ら以降、使徒は存在しません。

なので、前回お話ししました通り、カトリック教会のローマ教皇を使徒ペテロから継承された使徒性を持つ特別な存在であると主張することは、聖書の記述からは逸脱しているということになるでしょう。

Part One

そして、今日考えていきますのは、「預言者」「伝道者」「牧師また教師」という職分についてです。

先ず「預言者」という職分についてですが、「預言」または「預言者」という言葉は、予定の予の予言者ではなく、聖書の言う預言者は、言葉を預かる者と書いて「預言者」です。

つまり、神の言葉を預かりそれを人々に語る者たちのことを、聖書では「預言者」と言います。

もちろん、その預言には、これまでエペソ書で見えてきました通り終末があり、新しい天と新しい地の創造が将来・未来のいつの時に起こる究極的な行く末を予見し語ることも含まれていますが、

神の言葉を預かり語ることの核心は、イエス様が仰った通り、神を愛し、人を愛すということですね。

使徒パウロが、第一コリント14：39で、

コリント人への手紙14：39 (パウロ)

と言っていますが、ここでの「預言をすることを熱心に求めなさい」というのは、「未来を予知しなさい」とか「明日何が起こるのかを言い当てなさい」という意味合いの言葉ではなく、広い意味で、「神の言葉を、神の愛を、人への愛を熱心に語り、実践する者でありなさい」ということですね。

私が28年前洗礼を受けましたアメリカサンディエゴの教会には、預言の賜物を与えられているという女性伝道師の方がいらっしゃいました。

この先生は、第一コリントに記録されているような異言で祈ることも出来ましたし、他の人が自分で祈っている祈りの内容が良く分からない異言の祈りを説き明かしてあげることも出来ました。

また時には、一緒に祈っている方について神さまがどういう思いをもってその方を見ておられるのかというようなことをお伝えしたりもしておられました。

この異言の解き明かしだったり、神さまがどういうことをその人について思っておられるのかを聖霊の感動によって語っておられたことを、周りの人たちが、「預言の賜物」と表していたのかなあとと思います。

見る人によっては、この伝道師の先生が何か特別な存在のように映ったかもしれないかもしれませんが、当の本人は、ご自分のことを何か特別な人のように誇っていたこともなければ、そういう賜物を見せびらかしたり自慢して、ご自分のことを偶像化・神格化するような方でもありませんでした。

何よりも先ず第一に、聖書の御言葉に忠実に従い、聖書の御言葉を忠実に語り、聖書の御言葉を生きようと努めておられる方でありました。

以前、顧問牧師の清野先生がこの朝の礼拝で、第一コリントの講解説教をなさった時、「預言とは、今で言うならば説教です」と仰ったことがあったと思いますが、私もそう思います。

神の言葉である聖書の御言葉を語ること、私たち人間に知っておいて欲しいと神さまが思っておられる神の奥義の内容のすべてが記されているこの聖書の御言葉を、祈りによって、聖霊の感動によって、神さまが与えて下さる恵みによって、またその導きに従って御言葉を福音を語るものが、現代においてはまず第一に、預言であると言っても過言ではないでしょう。

そういう意味で、先程の女性伝道師は、預言の賜物があったと言えると思います。

しかし、この「預言する」という本来の聖書的意味を取り違えて、異端のようになってしまったり、また聖書から大きく外れて行ってしまった例が、教会の歴史の中に少なくない数見られるのが事実でもあります。

本来、エペソ書や第一コリントの著者である使徒パウロが意図している「預言」というものは、「現代においては既に止んでいる」と見なすのが、聖書的観点からして妥当かなあとと思います。

ただ誤解しないで頂きたいのは、これは、神の言葉が止んだという意味ではなく、語られるべき神の言葉は、もう既に聖書66巻に収められていて、それ以外のものを付け加える事は出来ないということです。

即ち、聖書66巻が、預言の完成であるということです。

Part Two

新約聖書において、また特に、今学んでいますエペソ書においては、「預言者」は、「使徒」とは、切っても切れない職分として登場してきます。

エペソ人への手紙2：20（パウロ）

「使徒たちという存在とその存在によって語られた神の言葉、預言者たちという存在とその存在によって語られた神の言葉を土台として、キリストのからだである教会が建て上げられた」と言います。

キリスト教会において、とても大切な大きな役割を担った人たちであるという点で、使徒と預言者には共通した部分があります。

でも預言者は、使徒たちとは違い、先ほど挙げました使徒の5つの条件を満たす必要はありません。

復活したイエス様に直接出会っていなくても、奇跡を行うことが出来なくても、預言者として立てられ活動した人たちが、聖書の中に登場してきます。

ただ一つ、彼ら預言者たちに共通しているのは、聖霊が直接真理を告げて下さった人たちであるということです。

そして、その聖霊の直接的な働きかけに霊が感動し、その与えられた霊的感動を言葉をもって言い表した人たちが預言者です。

例えば、ルカの福音書2章に出てきます84歳の女預言者アンナは、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた人でしたが、そんな彼女が、生まれてまだ2ヶ月に満たない赤子の主イエス様に出会った時、霊に感動を覚え、両親の懷に抱かれている主イエス様について語り始めました。

また使徒の働きには、歴史上初の異邦人教会アンティオキア教会が出てきますが、そのアンティオキア教会には多数の預言者がいて、その内エルサレムから下って来たアガボという預言者は聖霊に満たされ、聖霊の感動によって、世界中に大飢饉が起こることを神の言葉として伝え、キリスト者たちに注意を促しました。

同じく使徒の働きに、エチオピア人の高官に、イザヤ書53章の御言葉の説き明かしをもって主イエスの福音を語ったピリポには、預言をする4人の未婚の娘がいたと記されています。

先程の第一コリント 1 4 章には、預言することや預言者と言われる人たちについて書かれていますが、その内容については、現代の教会においても混乱と云いましょうか、理解の食い違いが少なからずありますので、「預言とはこうです。預言者とはこういう人たちのことです」と、過剰な断定をすることには注意をしなければならないと思いますが、

パウロの語る、または新約聖書に登場してくる預言者たちに共通している一つの話は、預言者は、聖霊がその人に直接神の真理を示し、神の御心やご計画が示され、その示された真理を、御心を、ご計画を語る事が出来た人たちだったということです。

使徒の条件として、「神さまから直接啓示を受けた人たちだ」と言いましたが、新約聖書時代・初代教会における預言者たちも、神様から啓示を受け、それを語る人たちであったというのが、聖書の記述から見えてきます。

第一コリントのコリント教会の問題は、少なくない数の預言者たちが、我先にと恍惚の境地の中で、その与えられた神からの啓示を競争するかのよう語ってしまい、秩序が乱れていたことでした。

それに対して、パウロは、「神は混乱の神ではなく、平和の神であられ、神から与えられた良いものを秩序正しく行いなさい」と注意しました。

コリント人への手紙第一 14 : 29 - 33、40

預言者は確かに、真理の啓示が与えられ、それを語る者たちでした。

でもしかし、この 2000 年前の時代と現代には大きな違いがあります。

そして、その違いに私たちは注意しなければなりません。

では、何が大きく違うのか？

2000 年前には新約聖書がありませんでしたが、2000 年後の私たちには、神の啓示が書き記されている新約聖書があるということです。

もし私たちに今も、新約聖書がなく旧約聖書しかなかったら、大変なことになっていたことでしょう。

ちょっと想像してみただけでも、このように座って穏やかに聖書の御言葉に耳を傾けるなんていうことは、もしかしたら出来なかったかもしれません。

「私はあの牧師のメッセージが神の啓示だと、預言だと思う。いやいや私はあの牧師、いやいや私はあの伝道師、いやいや私は私のメッセージが唯一の神からの啓示だと思う」と、ひっちゃかめっちゃかになっていたかもしれません。

初代教会は、神からの預言という観点から見た時、そんな不安定な時期を過ごさなければなりませんでした。

神さまは、先ず始めに使徒たちを立て、神の奥義や神の救い、そして神のご計画を、彼らの説教や教えの内に語らせ、真理をお示しになりました。

そしてさらに、聖霊に示されて、使徒たちが語った神の真理をなおも力強く語

る預言者たちのその言葉や働きを通して、やがてこの新約聖書としてまとめ上げられる神の言葉が立てられていきます。

こういう意味で、パウロの言う、そして新約聖書が書き記している預言者は、使徒たちと同じように一過性の臨時的職分であったと言えるでしょう。

つまり、神の奥義が語られ、その語られた奥義が新約聖書として記録されるまでの臨時的役割を担っていたのが、一義的に預言者だと言えるわけです。

Part Three

ですが、教会の歴史を見てみますと、「我こそは、新約聖書の内容を超える、またはその内容に付け加えるに値する啓示を神から受けた」という自称預言者のような人たちのために、時々混乱を来たすことがありました。

一旦、新約聖書が書き上げられますと、教会はその教えに従って歩むようになりますので、より安定的な方向へと進んでいきます。

例えば、初代教会がある程度定着し、落ち着き始めた時に書かれたテモテへの手紙やテトスへの手紙などの牧会書簡と言われる聖書には、「預言者」という言葉は出て来ません。

「預言者」の代わりに、与えられた聖書の御言葉を解釈し、主イエスという真理に関する知識を伝え教えるための牧師や教師、または監督、執事などの福音の職責を担う者たちが登場してきます。

即ち、次のフェーズ、次の段階に移っているということです。

ところが、その流れに反するかのように、自称預言者、自称新たな啓示を受けたという人たちが出てきたりしました。

ヨハネの黙示録 22 : 18 - 19 (パウロ)

今ここに書いてあります通り、新約聖書の観点から見て、新約聖書以上の啓示もなく、真理もなく、神の奥義も、私たち人間が知っておかなければならないだろう神の御旨やご計画もないということです。

ですので、もし、この啓示の範疇を超えて、新たな真理だったり、啓示だったり、福音だったり主張することがあれば、それを疑わなければならないですね。

そして私たちキリスト教会は、2000年という歴史の中でそれを行ってきました。

2世紀に起こったモンタノス派と言われる方々は、元々はとても敬虔な方たちで、始めは教会の間違いを正しく指摘していましたが、やがて、今風に表現するならば、変な方向に尖り始めてしまい聖書の語る真理から逸脱し始め、衝突し、遂には異端と見なされるようになってしまいました。

また、ローマカトリック教会が犯した最も大きな聖書の真理にそぐわない啓示だと主張していることは、マリア崇拝でしょう。

聖書的根拠が一切ないにもかかわらず、「新しい啓示を神から受けた」と、または、「聖書の中に隠されている内容を啓示として示された」と、「キリストの代理者として、使徒と預言者の権威をもって新たな教理を打ち立てた」と主張します。

正に、使徒と預言者の職分の聖書的無理解や誤解から、または、使徒たちがしなかった人への迎合から来ているものだと云わざるを得ないと思います。

そういう中で起こったのが、1517年に起こった宗教改革であり、教会を今一度聖書に立ち返らせるために起こした教会改革、信仰改革であるわけです。

宗教改革が起こった後も、「ツヴィッカウの預言者」と言われる人たちが、ドイツのツヴィッカウという都市で起こり、自分たちは天から送られてきた預言者であり、神の啓示を受けていると主張しながら、聖書を完全に無視し、聖霊によって直接啓示を受けているというところにまで行ってしまいました。

Part Four

預言者についての話をまとめたいと思います。

聖書の教えに従いますと、私たちが新約聖書を神の定めた聖典として持つようになってから、所謂、使徒パウロの言う新約聖書の意味する「預言者」は必要なくなりました。

なぜならば、完成した預言を、つまり神から預かった言葉の完成形を、今私たちは手にしているからです。

ここで、2000年後の世界を生きる私たちにとって大事なのが、新たな預言の言葉を神から頂くことではなく、頂いているこの神の啓示である聖書の御言葉を悟れるように、聖霊なる神様に御言葉を照らして頂き、悟らせて頂くことです。

それが、今という現代を生きる私たちが与る預言の恵みですね。

イエス様もこのように仰いました。

ヨハネの福音書14：26（パウロ）

私たち、使徒たちや預言者たちによって語られた神の啓示の言葉をこのように手にすることが出来る幸いに与っている者たちが、熱心に求めなければならぬことは、この手にしている神の啓示の言葉に、心が、霊が感動を覚えながら神の御声として鳴り響くように聖霊の助けを祈り続けることです。

だからパウロは、このように祈ったわけです。

エペソ人への手紙1：16－19（パウロ）

そしてさらに、

エペソ人への手紙 3 : 3 - 6, 14 - 21 (パウロ)

と祈るわけです。

今私たちに必要なのは、新たな神の言葉を預言することではなく、もう既に与えられている完成した神の言葉を悟り、神の言葉が私たちの内に刻まれ、神の言葉が光となって迫ってくるよう聖霊の灯を祈り求めることです。

聖霊なる神様は、聖書の御言葉を通して、私たちにお語りくださいます。

時々私たちは、「神の御心がよく分からない」というようなことを言ったり、思ったりすることがあるかもしれませんが、聖書の中に、神の御心のすべてが掛かれています。

「聖なる者でありなさい。戻って来なさい。わたしを知りなさい。わたしに従いなさい。互いに愛し合いなさい。互いに赦し合いなさい。互いに寛容を示し、愛をもって耐え忍び、御霊にある一致を熱心に求めなさい。一つになりなさい。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝しなさい。主イエスから目を離さないでいなさい。神と富に同時に仕えることは出来ません。神の国と神の義を第一に求めなさい。わたしが道であり、いのちであり、真理です。わたしから離れては、あなたがは実を結ぶどころか、何もすることが出来ないのです。わたしはあなたがたを、あなたがたを愛している。

」

もうすでに聖書の中に、神のすべての御心、神のすべての御旨が書かれています。

この神の御心が、私への語り掛け、私への癒し、私への力、そして、隣り人への神の心遣い、神の愛、神の熱心であることが分かるようにと、聖霊の照らしを祈るのです。

祈らなければならないでしょう。

私たちに必要なのは、新たな啓示ではありません。

もう既に示された完成された啓示が、私への啓示として悟れるように祈ることですね。

Conclusion

私は今、説教者としてこの講壇の上に立っておりますが、説教者は、「神から啓示を受けた」と言いながら立つてはいけないものですね。

むしろ、「神の啓示である聖書の御言葉を読み、祈る者である」と、「聖霊が照らして下さって悟らせて下さり、人々に語るべきメッセージを頂いた取るに足りない小さき者でしかありません」と、告白しなければならないでしょう。

只々、先ほど見ましたように、使徒パウロ先生が、「エペソ教会の人々のために祈っている」と仰ったように、ただ祈る者でしかないということを遜って告白

しなければならぬと思います。

このことは、何も説教者だけでなく、選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、神のものとされた民である私たち皆がそうあるべきでしょう。

神の御言葉を頂く恵みに預かった私たちすべてが、聖霊を求める者であればと願います。

時間が来てしまいましたので、「伝道者」「牧師また教師」については、来週学んで行きたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 1：17